

入館者2万人を達成 県立大の川村さんに記念品

深澤晟雄資料館は5月21日、開館以来の入館者が2万人に達しました。2万人目の入館者となった県立大学社会福祉学科4年の川村美沙樹さんに記念品を贈って2万人達成を祝いました。



佐々木理事長から2万人目の記念品を受ける川村さん(右)

川村さんの一行は、22日まで1泊2日の日程で、西和賀の高齢者の生活やまちづくりを学ぼうと、仲間との学生と教員を含む8人で訪問しました。

「2万人達成」を知らず

に入館した一行に、「本日5万人目の入館者が、資料館開館以来2万人目の入館者となりました!」と告げられると大きな拍手と歓声が上がりました。

川村さんには、NPO法人深澤晟雄の会・佐々木孝道理事長から「2万人目の入館おめでとう」と祝福の言葉を添えて、「村長ありき」など及川和男氏の著書2冊と西わらびを記念

に贈りました。

大学で社会福祉を学んでいる川村さんは、「入館者2万人目のことで大変うれしく思います。深澤村長は乳児死亡率ゼロ達成の過程で大変な努力をされたことを学び、その熱意と行動力に感動しました」と感想ノートに記しています。

川内ラン 再び資料館に

「深澤精神で頑張ります」

5月29日の錦秋湖マ

でゴールしました。

ランソンに招かれた公務員ランナーの川内優輝さんは、レース終了後に深澤晟雄資料館を訪問、一昨年に続くゲストランナーで資料館にも二度目の訪問となりました。

資料館には30分ほどの滞在で10分間の映像資料を鑑賞、大学時代にまとめた「地方自治と深澤村長」の論文を資料館に寄せられました。

錦秋湖マランソンでは、一昨年韓国の仁川アジア大会銅メダリストの走りを見せて、一般男子30キロの優勝者を6分近く引き離して1時間35分20秒

感想ノートに「公務員として深澤村長の信念を見習って職務に励んでいきます。もちろん、陸上でも自分自身の信念は最後まで貫きます」と力強いメッセージを残されました。



銅メダルを手に写真に答える川内優輝さん(資料館前で)

「元役場職員が綴る・あの頃の思い出」文集から

遠い思い出(夫・晟雄のことども)

～故ミキ夫人の回想録 ②～



ソファでリラックスの2人は満州拓殖公社時代？

深澤晟雄村長就任の昭和32年にミキ夫人は沢内村婦人連絡協議会長に。39年まで深澤生命行政と一体で地域に密着する婦人会活動の活性化に努め、生命尊重理念の定着に貢献しました。

深澤村長亡き後の41年、沢内村社会福祉協議会職員となり、48年から平成元年まで同会事務局長として深澤村長の遺志を継承、保健医療との連携を密にして住民福祉の向上に尽力されました。

つらくても皆が 心一つに頑張る

そんなこんながありました。とうとう村にブルが入ってきても、当時の村の財政では到底どうにもならなかったのです。思案の果てに期成同盟会なるものができて一時のいで、冬期交通確保の実現となり、ようやく盛岡、沢内間にバスが運行されたのでした。そして、どんな吹雪があってもそれ以後は休みなくバスが通る村になったのです。

そうなるまで、深澤の不在をねらうように毎晩夜遅く電話がかかるのです。自分の名は言わず、酒気を帯びた口調でどなり続けるのです。「オレ馬車ヒキだ」と言つて「村長を出せ」と。毎晩のこのおどしの電話には悩まされたものでした。

でもまた一方には、学校帰りの小学生が四、五人横に並んで手をつなぎ、足踏みをしながら、今払ったばかりの雪道を「ブルドウザ」「ブルドウザ」と嬉しそうに掛け声をあげて通る姿を見かけたときには、立ち止まって子どもたちの姿をい

つまでも見送ったものでした。

つらい時もありましたが、皆が心一つにして頑張ることができた良い時代であつたかも知れません。

歳末助け合いの 金色夜叉に満足

もう一つ。いまは12月、歳末助け合い運動が始まっています。何年の年だったのか明確には覚えていませんが、太田で公民館を会場にして当時の太田教育長と一緒に「金色夜叉」の一場面を演じたことがありました。教育長が「お宮さん」で、深澤が「寛一さん」で別れの場面を、大好評を得て拍手喝采を受けて得意であつたことを、今も私は忘れないで心に残っております。

